

「補助犬」と出会い、

輝いて生きる

「身体障害者補助犬法」—障害者の自立と社会参加のために—

—みなさんは「身体障害者補助犬法」って、知っていますか？

「身体障害者補助犬法」ってなに？

身体障害者の自立と社会参加のため、2002年10月に施行された法律です。「補助犬」とは「介助犬」「聴導犬」「盲導犬」の3種類（4頁の「論壇」参照）で、単なるペットではなく、一人ひとりの障害者の身体の一部として、生活を助け、支えるよう訓練された特別な犬です。

この法律で、公共施設や交通機関は「補助犬」の同伴を拒んではならないとされ、障害者が「補助犬」と行動を共にすることが社会的に認められました。そして2003年10月からは、デパートやホテル等の多くの人が利用する民間の施設でも、「補助犬」の同伴を拒むことができなくなります。

こうして、「補助犬」を伴った障害者の受け入れが進むことにより、障害者の自立と社会参加の可能性が広がります。では、自立と社会参加とはいったいどういうことなのでしょう？

—まず、この法律が制定されるに至るまでの話を、その原動力となった、「介助犬使用者」の木村佳友さんに語っていただきました。

誰も知らなかった「介助犬」

「シンシア」が「介助犬」として認定を受けたのが1996年7月でした。しかし、「介助犬」の公的な基準はなく、「介助犬」の育成団体が独自の基準により認定しているという状況でした。また、日本では3番目でしたから、当時は「介助犬」をほとんどの人が知りません。スーパーやレストランでも、ペットを連れてくるように思われて、同伴拒否がほとんどでしたから、一時は「シンシア」を家において外出することがありました。

そんな時に限って、街で物を落としたりして、それが拾えずに長い間、人が来るのを待ったこともあります。「シンシア」がいれば...と痛感しました。



木村佳友さん

「シンシア」とともに、理解を求めて

それで、同伴拒否されてもいいから、「介助犬」の説明を聞いてもらおうと、どこへ行くにも連れていくことにしました。店の中で吠えたり、お客さんにかみついたりするんじゃないかとの心配から同伴を断る店が多かったのですが、中には犬好きの店長さんがいて、しっかり訓練されているようだからと入店を認めてくれる店もでてきました。ぼくが食事をしている間、「シンシア」がじっと待っている様子を見て、「これからもOKです」と言ってくれました。

このことをきっかけに、「介助犬」をもっと多くの人に正しく理解してもらうことが大事だと実感しまして、講演会などで、「介助犬」は訓練されていて「迷惑をかけませんよ」と、理解と協力を強くうったえました。支援してくれる方もどんどん増え、ある大手のスーパーでは、独自のルールをつくって全店で受け入れてくれました。

しかし、鉄道の場合は、鉄道会社ごとに、事前の書類審査、面接、試乗試験などに合格して初めて乗車が許可されるというものでした。私と「シンシア」も数社から乗車許可を得ましたが、1社ごとに試験を受けなければならないのであれば、なんのために「介助犬」を伴っているのかわかりません。「介助犬」と自由にどこにでも行けるには、やはり、「法律で認めてもらうしかない」と意識して活動するようになりました。

そうぞう

2

2003.9*No.6

そして、市も国も動いた

そんな中、まず私の住む兵庫県宝塚市が市内の公共施設での同伴を実現してくれました。また、市では、「介助犬同伴可」というシールをつくり、民間施設にも「介助犬」の受入れを呼びかけてくれました。

同じ頃、地元選出の国会議員と出会う機会があり、「もっと多くの国会議員に『介助犬』のことを知ってもらうために、国会に来て下さい」と誘われ、1999年2月に「シンシア」を連れて国会の傍聴に行きました。そこで、「介助犬」の勉強会も開かれ、十数人の国会議員の方が出席してくれました。この勉強会をきっかけに、同年7月には超党派で「介助犬を推進する議員の会」が発足しました。そして、多くの方の支援のおかげで、ついに2002年5月に「介助犬」だけでなく「盲導犬」「聴導犬」も含めた「身体障害者補助犬法」が成立したのです。

「シンシア」は心の支え

もし「シンシア」がいなくても、なんとか暮らしていたでしょうけど、たぶん家に閉じこもりがちになっていたのではないかと思います。安心して街にでかけ、いろいろな人と出会い、法律の制定にもかかわるなど、前向きに生きてこれたのも「シンシア」のおかげです。「シンシア」がいなければ、講演をしたり、国会議員と会ったりする機会はなかったと思います。「シンシア」は介助の仕事をするだけでなく、生きていくうえでのぼくの心の支えでもあるのです。

—もう、お一人。「介助犬」の使用者の方のお話をうかがうため、ある中学校を訪れました。

「ムサシ」との出会いと別れ

茨木市立南中学校の3年生、稲積久美子さんは電動の車イスで学校生活を送っています。吹奏楽部でクラリネットを担当し、「山登りにもチャレンジしてみたい」と意欲的です。アニメ好きで将来は「声優」になる夢を持っています。

明るく、前向きに生きる稲積さんには、中学1年生のとき、そのきっかけになる「介助犬 ムサシ」との出会いがありました。

「ムサシ」を中学校に迎えるにあたっては、学校やPTAはもちろん、何よりも、生徒たちの深い理解と協力がありました。「介助犬」のトレーニングセンターまで出かけて取材した「学校通信」の

発行をはじめ、「ペットじゃないぞ！ぼくはりっぴなサラリーマン！」などの標語の募集と掲示など、さまざまな取り組みを行いました。

8月の夏休みには、学校生活に対応した「ムサシ」の実地訓練も行われました。「通学路を無事に登校することができるか」「通学途中で子どもやほかの犬が近寄って来たときはどうするか」——。あらゆることを想定した準備が進められました。

そして、いよいよ2学期から、稲積さんの「ムサシ」を伴った学校生活が始まりました。落とした物を拾ったり、ドアを開け閉めしたり、体育祭に参加したり、「ムサシ」は稲積さんのそばにすることが当たり前での存在でした。

しかし3学期の中頃、「ムサシ」は突然、天国に旅立ちました。稲積さんの自宅で開かれた「お別れの会」には多くの生徒がかけつけました。短い間でしたが、きっと「ムサシ」は学校にいろいろなものを残したのでしょう。「ムサシ」をモデルにして生徒たちが作成した「はり絵」が、校舎の玄関横に今もあざやかに飾られています。

それから1年半、3年生になった稲積さんには、夢を追い、チャレンジする気持ちが力強く息づいています。「『ムサシ』のおかげで、たくさんの人と出会えて、いろんな体験をすることができました。私の生き方も変わったと思います。」とはにかみながら、笑顔で話してくれました。



稲積さんと「ムサシ」

取材を終えて

「補助犬」は、ペットでもマスコットでもなく、もちろん単なる道具でもありません。わたしたち人間と同じく「生命」をもった生き物で、使用者と心を開いて精神的につながりあえる存在なのです。

だからこそ、「補助犬」と共に暮らすことで、使用者はもちろん、その周囲の人、一人ひとりが前向きな姿勢で輝いて生きる、そして本来の自分の持つ力が発揮できる——エンパワメント（用語解説参照）につながっていく。それこそが、自立と社会参加なのだと強く感じました。